

「やる気スイッチ・オン」

副校長 松永 史郎

少し前まで流れていたCMに「やる気スイッチをオンに」というキャッチフレーズがありました。放送を見ながら、うまいことを言うものだと感心していた覚えがあります。

「ほめて育てる。」子育てについて語るとき、当たり前のように言われていることですが、実際はなかなか難しいと感じられている方も多いのではないのでしょうか。

4月に6年生を対象に行われている全国学力・学習状況調査の結果では、自尊感情の高い子ほど国語や算数の学力も高いということが数値として表れているようで、「ほめる」ことの有用性は確かにあるようです。

私事ながら、自分にも思い当たることがあります。小学校5年生の時、音楽の先生から言われたひとこと。

「松永君の声はよく響くね。」

今でもその場面のことを覚えており、あれが自分にとっての「やる気スイッチ」だったなあとつくづく感じています。そのひとことですっかり気をよくした私は、声楽はもちろんピアノも習ったことが無かったのに、小学校の合唱部への入部を決意し、(変声期前のボーイソプラノで)毎日楽しく歌っていました。その後も特にプロの音楽家を目指したわけでは無いのですが、縁にも恵まれ、現在に至るまで趣味としてずっと音楽(合唱)を続け、教員としての仕事の面でも音楽に関わることができているというわけです。そう考えると、音楽の先生のあのひとことが人生を豊かにしてくれたのだと思い、感謝の気持ちでいっぱいです。

そして、先生には何気ない気持ちで発したひとことだったのかもしれませんが、見えないスイッチを入れて魔法のように人を幸せにできる……その魅力に気づき、自分も同じ仕事を選んだのだと思います。

教員として子どもたちと接していると、子どもたちはとてもやわらかな心をもっていて、ちょっとしたきっかけ、ひとことで大きく力を伸ばすことができるんだなあと実感する場面によく出会うことができます。もちろん、しっかりと指導しなければならない場面もたくさんあり、そこは冷静に判断して、ビシッと叱ることも必要です。ただし、叱られてばかりでは、「やる気スイッチ」は入らないのでしょうか。要は、めりはりが必要で、どの子にも自分が認められているという実感をどこかで味わわせてあげるようにすることが大切なのでしょう。

自分の子育てを振り返ってみてもそうですが、「毎日の生活の中でなかなかほめることができない。ほめることが見つからない。」そういう悩みは、どのご家庭の中でもきっとあるのではないかと思います。

育児書に書いてあるような「ほめるコツ」はいろいろとあるのですが、私は、基本的にはプラス思考で子どもの姿を見つめることが大切なのだと感じています。できないことばかりに目を向けると、ついつい叱る材料ばかり見つけてしまいますが、今できていることに目を向けることで、大人の発する言葉が変わってきます。結果だけを求めずに、取り組もうと努力していることに目を向けることで、子どもが努力を続けていく意欲につながります。

学校では、子どもたちを「ほめる」機会をたくさんつくり、タイムリーに言葉かけをしていければと考えて指導にあたっています。ご家庭でも「ほめること」についていっしょに考え、取り組んでいただくと幸いです。一人でも多くの子どもたちの「やる気スイッチ」がオンになるように…。